

資料

徳川時代の出生率及死亡率

其若干の事例

關山直太郎

はしがき

徳川時代の人口に關しては從來諸學者の研究乏しからず、殊に中期以降に就ては全國人口の概數も略推測され、人口の趨勢——殆ど増減なく百數十年間停頓してゐた事實——、竝に其要因をなした社會的經濟的事情も大體之を窺ひ知ることを得る様になつた。然し一步突き進んで當時の人口靜態或は動態の内容的分析考察、例へば男女別・年齢別人口構成、婚姻關係、出生、死亡率、人口移動等の問題に就ては從來殆ど論及されたものなく、現在の所全國的趨勢は勿論のこと、一藩・一鄉村に限つても之を通觀することは全く不可能である。偶、之を掲ぐるものも一村・一藩の人口趨勢を例示するに當り、事の序で的に出生・死亡及出入數を併記する位で、其例すら極めて乏しいのである。蓋し徳川時代は尙ほ封建社會であり、其當然の結果として全國的統一的な人口調査が行はるゝことなく（享保以後の全國人口調査と雖も、調査月、調査方法、調査の人的範圍に於て統一的でなかつた）、又村々の宗門改帳或は人別帳の如きも記載内容は區々不統

一であり、而も徳川二百數十年に互つて記録を残存するものは、一鄉村に就ても極めて乏しいであらうから、自然に資料等の關係、技術的な關係から之迄其研究も等閑に附せられたものであらう。

右の様な情態であるから、差當り標題の様な出生率・死亡率を求むることも、たかゞ或時期の或地域の夫に限らざるを得ない。それすらも現在の所資料が洵に乏しく、多少地方史誌、藩史等も漁つたものゝ殆ど得る所がなかつた。然し乍ら全國村々には尙ほ未發掘の古記録も相當あるべく、將來此等を個別的に又綜合的に利用して、其地方の大體の趨勢を知り、更に之を擴大して一藩一州に及ぼし、以て全國的な趨勢或は地方的な型を推測することは必ずしも不可能ではなからう。嘗て陶山鈍翁の遺著に依て對馬藩の出生率及死亡率を算出紹介された増谷達之輔氏は、之を以て「一般出生率を推定する上に於ての一大なる礎石」となされた。私も徳川時代の人口現象を研究する爲の發足點として、先づ若干の事例に依り當時の出生率及死亡率を紹介して見たい。然し差當り根本資料に依ることを得なかつたので、從來諸家が發表されたものに就て、之を算出するに過ぎない。事例も餘り僅少に過ぎ、又時代的に云つても極く限定されてゐるので、勿論之に依て徳川時代の出生率・死亡率を一般化することを得ないし、又之からして何らかの結論を引出すことも出來ない。唯冀くば將來更に事例を豊富にし、以て或程度迄一般化し、又結論し得る様に致したいものと思ふ。江湖の識者の垂示を得たい所以である。

尙後掲比率の算出に就ては、便宜上其年の總人口を以て其年の（嚴密に云へば前年調査月から當年調査月迄の）出生數及死亡數を除し、千分率を出したものである。而して一藩全體に互る様な比較的大量の人口を擁してゐる場合は各年の比率を出したが、一村限りのものは實數が餘りに小に過

ぎ、且調査の月が年に依て異動して計數にも影響することもあり(註)、又時に依る偶然性に左右されることも多いので、此等は全體五箇年間の總和比率に依ることとした。

(註) 陶山鈍翁は對馬藩に就てであるが「宗門改の時節の儀以前は正二月に仕候得共、其時節に差闕へ候儀共有之候て、時節段々相延五六月に改候様に成り候事も有之、又三四月に改候事も有之候、人高、生死、死人の高も宗門改を仕候月に極候高にて御座候故、前年は二月に改め、翌年は三月に改候時は、翌年の改之人高、生子高、死人高一ヶ月分多く、前年は五月に改め、翌年は四月に改候時は翌年の改の人高、生死高、死人高一ヶ月分少き筈に御座候」と云つてゐる。斯かることはどの村に就ても云へるのである。

(1) 「口上覺書」、「日本經濟叢書」卷四、七一頁。

## 一、對馬藩の例

對馬藩の出生及死亡率に就ては、會て増谷達之輔氏が「徳川時代の出生率、附死亡率」と題して紹介された<sup>(1)</sup>。右は「日本經濟叢書」第四卷及第十三卷に收容されてゐる陶山鈍翁の遺著「口上覺書」に記載する計數に依て算出されたのである。鈍翁名は存、通稱庄右衛門、明暦三年對馬國に生れ、享保十七年七十六歳で歿した。多年郡奉行として民政に當つたが、退役後は専ら農政に關する著述に従事した。「口上覺書」は其一であり、民政に關する諮問に答えて郡奉行所に提出したものである。

「口上覺書」に記する對馬藩の人口は、寛文五年から正徳二年迄約四十年に亙るが、延寶二年迄の分は不完全であり、又缺年が存する。而して延寶五年以後の分は「府中」(現在の嚴原)、「鄉村」、「銀山」(下縣佐須郷在)の三地域に區分して、夫々の人口數を載する。毎年の出生數及死亡數を記してゐるのは、貞享四年以後であるが、更に元祿十四年以後は之をも右三地域に

區分してゐるので、粗略乍ら都鄙別竝に銀山(勞働者が大多數であるのは云ふ迄もない)の出生及死亡率を算出するの便宜を得らるゝ。此點に於て實に貴重な資料と云はねばならぬ。今出生及死亡數が判明してゐる貞享四年以降の全藩人口竝に出生、死亡數及其千分率、同じく元祿十四年以降の夫等を三地域別に表示しよう。比率は増谷氏の計算に依るものであるが、檢算の上訂正したものである。

### 1 對馬藩人口、出生、死亡數及千分率

年次	總人口	出生數	死亡數	出生率	死亡率
貞享 四	三二、六一	五五四	五六六	一七七七	一八・一六
元祿 元	三一、〇二六	五二〇	五七八	一六七六	一八・六三
〃 二	三一、〇九二	六四四	四七三	二〇七一	一五・二一
〃 三	三一、五五七	七八四	七三五	二五・一六	二三・五九
〃 四	三一、四五八	六三八	五一六	二〇・二八	一六・四〇
〃 五	三一、五四八	六二八	七六四	一九・五八	二四・二一
〃 六	三一、六四四	五八五	九七〇	一八・四八	三〇・六五
〃 七	三一、六九四	七二八	七七二	二三・六五	二四・三二
〃 八	三一、九五三	七九四	七八五	二四・八四	二四・五六
〃 九	三一、三八三	六九〇	五〇九	二二・三〇	一五・七一
〃 一〇	三一、四六二	六五六	七三〇	二〇・二〇	二三・四八
〃 一一	三一、五八〇	五九七	五八八	一八・三二	一八・〇四
〃 一二	三一、七二五	六〇五	五六六	一八・四八	一七・二九
〃 一三	三一、六九二	六〇四	八八七	一八・四七	二七・一三
〃 一四	三一、四三八	六二八	七三〇	一九・三六	二三・五〇
〃 一五	三一、〇二八	六七二	八八八	二〇・九五	二七・七二
〃 一六	三一、七四七	五七四	七四三	一八・〇八	二三・四〇
寶永 元	三一、五三六	六四九	七六八	二〇・五七	二四・三五
〃 二	三一、五二三	七四一	六六三	二三・五〇	二一・〇三

同上三地域別表

年次	人口數			出生數			死亡數			出生率			死亡率		
	府中	鄉村	銀山	府中	鄉村	銀山	府中	鄉村	銀山	府中	鄉村	銀山	府中	鄉村	銀山
寶永 三	三、六二二	七、一五五	五、三一一	二、三六一	一、六七九	一、六七九	〃	七	二、九〇三	六、七〇	八、一三	二、三〇七	二、八〇〇		
〃 四	三、三一九	七、八〇〇	六、二一一	二、四九〇	一、九五四	一、九五四	正徳	元	二、九六一〇	五、三六	八、三五	一、八一〇	二、八一九		
〃 五	三、〇八五三	六、六九	七、三四	二、一六八	二、三九九	二、三九九	〃	二	二、九五〇三	七、三六	八、三三	二、四九四	二、七八九		
〃 六	三、〇、三三三	六、三二	一、〇〇七	二、〇九一	三、三三一	三、三三一	平均	均	〃	〃	〃	二、〇八一	二、二七四		
元祿 一	一、五、九三五	一、五、八八〇	六、二二三	二、八八	三、三五	三、七七	府中	三、三四	一、九	一、八〇七	二、一〇九	八、〇二	二、三六五	二、一〇三	三、〇四九
〃 一五	一、五、四四七	一、五、九八五	五、九六	二、五六	四、〇五	五、七八	鄉村	二、八〇	三、〇	一、六、五七七	二、五、三三	一、六、七七	三、七四一	一、七、五一	五、〇三三
〃 一六	一、五、一二七	一、六、〇三八	五、八二	一、四八	四、一〇	三、二八	銀山	三、八七	二、六	九、七八	二、五、五六	二、七、四九	二、一、六八	二、四、一三	四、四、六七
寶永 元	一、四、九二六	一、六、〇三八	五、七二	二、五三	三、九一	三、六二	府中	三、九四	一、二	一、六、九五	二、四、三七	八、七四	二、四、二五	二、四、五六	二、〇、九七
〃 二	一、四、六九五	一、六、二五九	五、六九	二、五九	四、六五	三、九二	鄉村	二、五二	一、九	一、七、六二	二、八、五九	二、九、八七	二、六、六七	一、五、四九	三、三、三九
〃 三	一、四、五八〇	一、六、四七二	五、六九	二、三四	四、八一	三、九二	銀山	二、七二	七	一、五、三六	二、九、二〇	一、七、五七	一、七、二八	一、六、五一	一、二、三〇
〃 四	一、四、〇一九	一、六、七四〇	五、六〇	三、四七	四、一七	三、二五	府中	二、六六	二、一	二、四、七五	二、四、九一	二、八、五七	二、三、一八	一、五、八九	三、七、五〇
〃 五	一、三、二六一	一、六、九三一	六、六一	二、〇八	四、四一	三、五八	鄉村	三、五四	二、二	一、五、六八	二、六、〇四	三、〇、二五	二、六、九九	二、〇、九〇	三、三、二八
〃 六	一、二、五一五	一、七、〇六七	六、五一	一、七五	四、五〇	五、六七	銀山	四、〇六	三、四	一、三、九八	二、六、三六	一、〇、七五	四、五、三〇	二、三、七八	五、二、三二
〃 七	一、二、〇九一	一、七、二〇二	六、四二	一、九二	四、六七	四、五三	府中	三、四二	一、八	一、五、八七	二、七、一四	一、七、一三	三、七、四六	一、九、八八	二、八、〇三
正徳 元	一、一、九三六	一、七、〇五四	六、一〇	一、四七	三、八三	二、五〇	鄉村	五、六〇	二、五	一、二、三三	二、二、四五	九、六七	二、〇、九四	三、二、八三	四、〇、三二
〃 二	一、一、八三九	一、七、〇五七	六、〇七	二、二八	五、〇四	三、一三	銀山	四、九一	一、九	一、八、四一	二、九、五四	二、三、〇六	二、六、四三	二、八、七八	三、一、三〇

右表に依て見るに、對馬藩の出生率は元祿三年の二五・一六を最高とし、

同元年の一六・七六を最低とし、元祿八、寶永四、正徳二の各年は稍、高い

部に屬し、貞享四、元祿十六、正徳元の各年は低い部に屬し、大體に於て

二〇臺を上下する状態で、一般に低率である。之に對して死亡率は、寶永

六年の三三・三二を最高とし、最低は元祿二年の一五・二二であり、元祿六

年、寶永七年、正徳元年は高い部に屬し、元祿九年、同十二年、寶永三年

は低い部に屬し、大體に於て二十數臺を上下する。勿論此高低は鈍翁の指

摘する様に、調査の月(宗門改と同時に)の不同、及「時行の病」等に主として

原因したのであらうから、簡単に趨勢を云爲することが出来ない。然し兩

率を通觀するに死亡率が出生率を超過する年が多く、從て總人口は漸減の

傾向があり、初期の三萬一千臺が末期には二萬九千臺に減少してゐる。

率の差異に比較して總人口數の遞減が見られないのは入出領者を除外

したからである。(他國生れの者及入出領者に就ても鈍翁は記載してゐ

る<sup>(2)</sup>)。

本庄博士の研究に依れば、大體に於て徳川中期以前には人口増加の傾向があり、中期以後には停頓状態を示したといふことであるが、之は勿論全國的に通観した場合の結論で、必ずしも個別的に妥當しない。對馬藩に於ては中期以前に早くも右の如き漸減乃至停頓状態を示してゐるのである。蓋し同島は日本海中の一島嶼、田畑少く、磽确不毛の地多く、人口收容力が典型的に制限されてゐた爲であらう。(註)

(註) 對馬藩は十萬石の格式であつたが、領内には表向き石高の定めがなかつた。然し鈍翁が其著「對韓雜記」に記してゐるところに依ると、大體に於て島内の農産物は麥一萬六千石、米千五百石、稷千五百石、蕎麥五千石、小豆六千石であり、尙肥前國基肄、養父兩郡内の領地一萬一千石が存した。島民の食糧は大體以上領内の農産物及肥前領からの貢納米及朝鮮からの輸入米一萬六千俵(五斗三升入)であつた。即ち彼は前記の著書中、「今州中の人數鄉村に作る所を食む者一萬八千人、屬郡より貢する所を食む者四千人、筑紫の買米を食む者三千、貴國(韓國)の米を食む者七千人」と記してゐる。

次に之を府中・鄉村・銀山別に見ると、鄉村の出生率が連年遙かに他の二地方を凌駕してゐることが知られる。尤も銀山が高率の年もあるが、之は其實數が餘りに小に過ぎ、輒く比較すべきではあるまい。府中・鄉村の出生率の差異に就き鈍翁は、「府中の儀人高に應じ候ては生子高多く(少く)の誤候は、府中には妻を持申下人多く、鄉村には妻を持申下人少き故にて御座候」と正當に觀察してゐるが、徳川時代に於ても市街地よりも農村の出生率が高かつたのは一般的であらう。尙彼は鄉村の人口増加(寶永年間の)に就て興味深きことを語つてゐる。即ち當時島内に猪・鹿の跋扈が甚しく、爲に農産物は大害を蒙り、人口を養ふ上にも大に影響を興へたが、其郡奉行在職中徹底的に猪・鹿狩を實行し、遂に其患害を免除し得、爲に著しく人口増加を來したと云ふのである。(註)

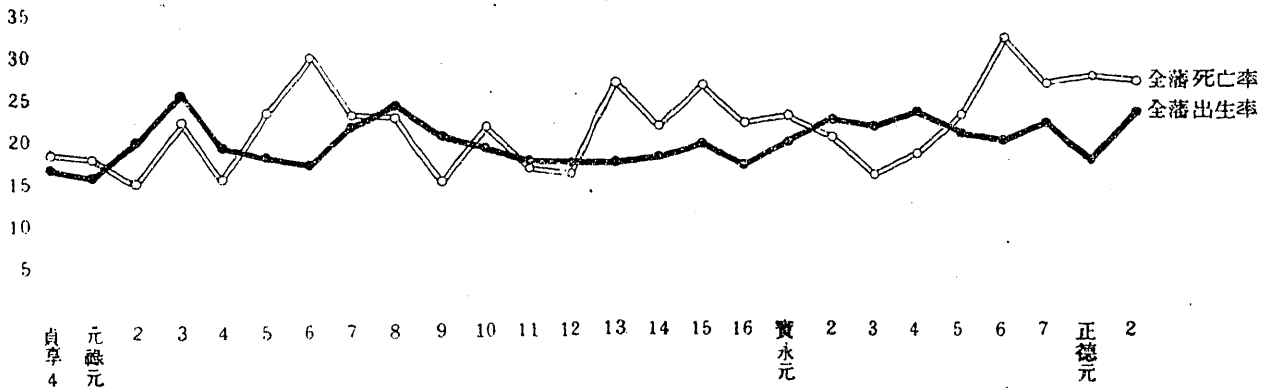
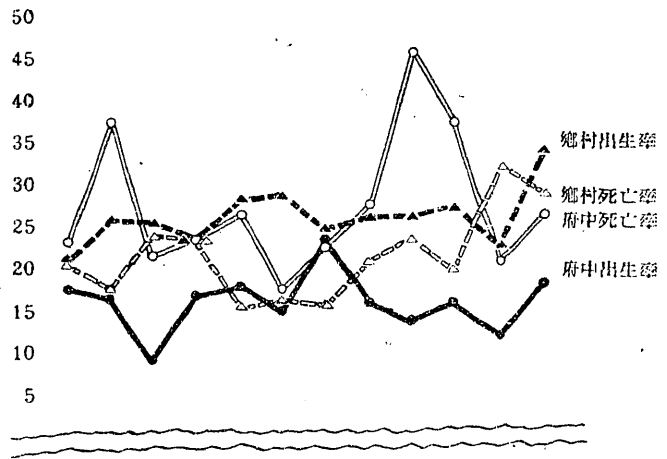
### 徳川時代の出生率及死亡率

(註) 彼は其著「受益談」に「猪逐詰ハ元祿十三年庚辰ノ冬ヨリ始マリ十年ヲ經テ、寶永六年己丑ノ春ニ至リテ成就セリ、鄉村ノ人高ノ知レ居ケルハ延寶五年丁巳ヨリノ事ニテ、丁巳ノ年ハ一萬四千五百九十三人、寶永六年甲申ニハ一萬六千三十八人、丁巳ヨリ甲申マデ二十七年ノ間ノ人高ノ増シ千四百四十五人ナルニ、今年享保十六年辛亥ノ鄉村ノ人高ハ一萬八千七百五十人、猪逐詰ノ始マリシ後ノ六年目、乙酉ノ年ヨリ今年辛亥マデ二十七年ノ間ノ人高ノ増シハ二千七百十二人」と記してゐる。此頃の出生率の微増及死亡率の減少は其原因の全部が猪狩の結果でもあるまいが、或は重要な一因を爲したものであらう。

次に死亡率に就ては年に依り變動があるが、大體に於て府中が鄉村よりも多少高く、銀山に至ては著しく高率を示し、中には五〇を越ゆる年もある。鈍翁は「生子高少く死人高多き年は時行の病有之たる年にて御座候」と云つてゐるが、醫療設備、衛生思想が農村も市街地も大差なかつた當時に於ては、都市の方が農村よりも死亡率が高いこともあり得べく、殊に流行病等の患は都市の方が受け易かつたであらう。銀山の特別に高率なる理由は單純に結論し得ないが、坑工場施設(マニユファクチュアの形態であつたのは言ふ迄もない)、勞働條件(當初は領民の徭役勞働であり、後には賃銀勞働者も發生した)の劣悪、幼年竝に老年其他婦人勞働者等が少くなかつたことを暗示するものではなからうか。

(註) 延寶年間の銀山人口は、一、三五〇人位であつたが、産出量の減退と共に廢坑となるものあり、人口も減少し、後には約半減した。尙同銀山の勞働者状態に就ては遠藤正男氏の「銀山に於ける近代的勞働者の萌芽——徳川時代對馬國諸銀山の勞働者状態——」を参照せられたい。

尙府中・鄉村に就て夫々の出生及死亡率を對照するに、圖表に見る如く、府中の死亡率は連年出生率を超過してゐるに對して、鄉村の方は常に出生率が死亡率を超過してゐる。従て兩者の人口數は、町方が漸減してゐるの



に對し、鄉村は漸増を示してゐるのである。對馬全藩の人口は此農村の出生超過に依り、辛うじて激減を免れたものに外ならぬ。此町方と鄉村との出生死亡率の相反する傾向は對馬藩だけの特例か否か(恐らくそうであるまい)、固より尙吟味を要するが、頗る注意に價ひするものと思ふ。

- (1) 「統計集誌」第五五一號(昭和二年六月)一〇頁——一七頁。
- (2) 「口上覺書」(前掲、七二頁——七九頁)
- (3) 「人口及人口問題」四七頁。
- (4) 「日本經濟叢書」第十三卷三七五、六頁。
- (5) 同上第四卷七二頁。
- (6) 同上五七二頁——五七三頁。
- (7) 同上七二頁。
- (8) 九州帝大「經濟學研究」第六卷第四號(昭和十一年十二月)。

## 二、南部藩の例

森嘉兵衛氏の「舊南部藩に於ける天明の飢饉」と題する論文<sup>(1)</sup>中、寶曆三年より寛政十年に至る(此の間多くの缺年がある)南部藩の戸數、人口、出生、死亡數及入出領者數が掲載され、且つ其年の作物との關係が示されてゐる。同表は新渡戸仙岳氏編「舊藩時代口戸沿革資料」を中心とし、森氏が訂正作成されたものである。今之を轉載し、且出生、死亡率を算出して見よう(入出領者を除外す)。

### 南部藩人口、出生、死亡數竝千分率

年次	戸數	人口	出生	死亡	出生率	死亡率	備考
寶曆三	三,五二	三五,九〇	六〇元	九九三	一六八	二七八	不作
〃 七	四,〇七	二九,四三	二,六九七	八,三五〇	九〇七	二,六〇七	飢饉

明和四	五、三六八	三〇六一〇	六、八七二	六、〇三三	三、三四	三、三三	平作
〃五	五、四〇〇	三〇、八五九	七、七五五	八、一九六	三、五〇九	二、六〇	〃
天明元	五、一八五	三〇、六〇〇	八、三七九	八、三六九	二、七五八	二、七〇一	不作
〃二	五、〇七四	三〇、五八三	八、四〇八	八、五七六	二、七六二	二、八〇四	〃
〃三	五、〇三二	三〇、六〇七	八、五三九	八、六五五	二、七〇〇	二、六三	〃
〃四	四、五七〇	二四、九六三	七、九一四	六、六九六	三、一八	二、五三四	飢饉
〃五	四、七九九	二四、六五四	八、五九九	八、六二二	三、四三	三、四七	〃
〃六	四、七九九	二四、九七三	八、二五九	八、八二二	三、三六	三、六二	〃
〃七	四、九六六	二四、七六六	八、九七六	九、〇六八	三、五七〇	三、五三	〃
〃八	四、九七〇	二四、一四四	八、六七二	八、七六二	三、五三	三、六〇	凶作
寛政元	四、九四一	二四、六八二	九、〇三三	九、〇三三	三、五三	三、八三	不作
〃一〇	四、五六六	二四、六一七	一〇、四三〇	一〇、九九七	四、三三	四、六七	平作

之は云ふ迄もなく天明度の飢饉期を中心とする前後數年の人口現象を示したものであつて、同地方の恆常的狀態を表はすものではない。然し數字の示す所に依ると、凶作飢饉と云ふ特殊の期間にも拘はらず、出生率は必ずしも低くなく、最低の九・〇七及一六・八八を姑く論外とすれば、明和期には二二乃至二五、天明初期には二七臺、同後期には三五―六臺を示し、寛政十年には四二臺にも達してゐるのである。次に死亡率に就いて觀察すれば、天明四年の二六三は勿論稀有の例外としても、連年非常に高率であつて、僅かに明和四年が若干の出生超過を示すのみで、他は悉く死亡超過であり、從て入出領者を度外に置くと、寶曆三年の戸數六二、五二一戸、人口三五五、九八〇人は、寛政十年には四五、六七六戸、一四六、一五七人に激減してゐるのである。尙ほ森氏は農作狀況と出生、死亡率との相關關係に就て、

「此の表に於て明瞭に觀知し得るのは人口の増減が作況に依存してゐることである。明和年間より死亡率が急激に上り、安永年間に至つて死

亡率が常に出生率より高くなつてゐるのは凶作の結果である。人口の總數が減少してゐるのに、出生率が増加し、死亡率がそれに増して増加してゐるのは注目すべき現象である。即ち連年の凶作の（結果）榮養缺乏し、弱兒の出生率と死亡率とを増加した爲めではないだらうか。天明四年の死亡率の高いのは勿論三年の飢饉の結果であらう……」<sup>(2)</sup>

と云つてゐられる。此表で作柄と出生、死亡率の相關々係が明瞭に觀知されるか否か、又其關係を爾く簡單に結論して宜しいか否かは、多少問題の餘地が存する様であるが、何れにしても南部藩に於ては凶作飢饉期に於てすらも、出生率は相當高かつた事實（死亡率が高いのは勿論である）は看取される。此特殊の一時期の出生、死亡率を捉へて、多産多死の東北型が早くも徳川時代に現はれてゐるといふ結論を下すことは勿論出来ないが、對馬藩の夫と比較して（時代の相違はあるが）大差あるに徴すれば、或ひは其の一斑を示すものではないかとも思はせる。

- (1) 「社會經濟史學」第二卷第一號（昭和七年四月）
- (2) 同誌、七三頁。

### 三、甲斐國巨摩郡今福村の例

前二例は一藩全部の合計で、計數も稍大であるが、以下に紹介するのは一村の出生、死亡率の變遷である。第一例は曾て小野武夫博士が「村落人口の變遷に關する一考察」と題して發表されたもので、<sup>(1)</sup> 甲斐國巨摩郡今福村、現在の山梨縣中巨摩郡忍村の大字今福である。計數は博士が同村舊名主の所藏した「家數人別増減書上帳」數十冊に依て拾ひ上げられたもので、若干の缺年があるが、文化十三年から明治八年に至る約六十年

間に互つてゐる。内容は戸數、男女別人口、出生、死亡數、出村入村者數、差引増減であるが、明治以後は缺年多く、又出生、死亡數を缺き、更に文久元、二、三の三箇年は出生者中に入村者を加算してゐる（後掲表の文久度の出生率の稍、高きは假に之を加算したからである）。戸數は文化十三年六五戸、慶應四年以後六四戸で殆ど増減なく（最多六八戸）、又入村者は此六十年間に二一五人、出村者は二三人で、年々略、相如くから、何れも之を除外し、左に毎年の男女別人口竝に出生、死亡數を掲げ、且つ五箇年間（缺年がある場合は適當に區切り）の總和比率を算出して見よう。

甲斐國巨摩郡今福村人口、出生、死亡數及千分率

年次	人口		出生	死亡	實數比率	實數比率
	男	女				
文化一三	一六三	一八一	九	一	六	一七
〃 一四	一六〇	一八一	一一	一	八	一七
文政元	一六〇	一八六	八	一	五	一七
〃 二	一五八	一八七	八	一	八	一七
以上合計	六四一	七三五	三六	二・六	二七	一六二
文政八	一五八	一六九	八	一	四	一七
〃 九	一五九	一七一	六	一	五	一七
〃 一〇	一五八	一七八	一四	一	八	一七
以上合計	四七五	五一八	二八	二・九	二七	一六二
天保三	一五四	一八〇	一四	一	一五	一七
〃 四	一六五	一七四	八	一	七	一七
〃 五	一六四	一七一	六	一	二	一七
〃 六	一七一	一七六	一三	一	四	一七
〃 七	一七〇	一七五	七	一	七	一七
以上合計	八二四	八七六	四八	二・四	三五	一五九
天保八	一七一	一七五	一一	一	六	一七
〃 九	一五八	一七二	六	一	五	一七
〃 一〇	一五九	一七三	六	一	五	一七
以上合計	四七五	五一八	二八	二・九	二七	一六二
天保三	一五四	一八〇	一四	一	一五	一七
〃 四	一六五	一七四	八	一	七	一七
〃 五	一六四	一七一	六	一	二	一七
〃 六	一七一	一七六	一三	一	四	一七
〃 七	一七〇	一七五	七	一	七	一七
以上合計	八二四	八七六	四八	二・四	三五	一五九
天保八	一七一	一七五	一一	一	六	一七

元治	二	一四九	一七九	三三八	五	一〇
慶應	二	一四九	一八四	三三三	七	二
〃	三	一三九	一八七	三三六	五	九
〃	四	一三七	一八五	三三三	五	一
以上合計		五七四	七三五	一、三〇九	二二	一六・八一
					二六	一九・六六

此計算に依ると、嘉永期以前は概して出生超過を示し、同期の如き出生率三二・五〇、死亡率二三・二九で、實數に於て一七の超過であるが、安政期以降は概して死亡超過で、同期は出生率三七・二四に對し、死亡率は四〇・五八を示して居り。爾後兩率とも低下してゐるが、死亡率の超過は變りなく、從て人口の漸減を來たし、文化十三年に三四四人であつたのが、慶應四年には三三二人となつた。

尙本村は最初から最後迄女子人口が男子人口を遙かに超過（文化十三年男一〇〇に對し女一一一、慶應四年同一三五）してゐるのが特徴であるが、其理由及之が出生死亡に影響してゐるか否か、勿論判然しない。

(1) 「社會經濟史學第一卷第一號(昭和六年五月)」

#### 四、武藏國葛飾郡東舟堀村の例

土屋喬雄氏の「宗門改帳の社會經濟史的考察」と題する論文<sup>(1)</sup>中、徳川時代の動態人口の一例として、標題村の人口が關説されてゐる。即ち同村の宗門改帳に依て、寛政五年乃至嘉永七年の六十年間の（若干の缺年あり）、村高（六二三石餘、増減なし）、耕作地高（小前持の分、他村へ入作の分）、家數（寛政五年一六三戸、殆ど増減なく嘉永七年には一六二戸）、男女別人口、入出村者、出生及死亡數が計上されてゐる。但し出生・死亡數

徳川時代の出生率及死亡率

の判明してゐるのは天保二年以降であるから、茲には其以前を省略し、今福村の例に依て五年毎の總和比率を掲げよう。出入人口は殆ど連年出生死亡數よりも多いが（天保二年より嘉永七年迄出村者九六三人、入村者一、一九九人であるが、戸數の殆ど増減なきに徴すれば、此等は主として奉公人の出入であつたらう）、今之は表から除く。

武藏國葛飾郡東舟堀村人口、出生、死亡數並比率

年次	人口		出生數	出生比率	死亡數	死亡比率
	男	女				
天保二	四五二	三七四	二二	二五	—	—
〃	四五〇	三七一	二二	二五	—	—
〃	四六〇	三七〇	二二	二五	—	—
〃	四六八	三六四	二二	二五	—	—
〃	四六六	三七四	二二	二五	—	—
〃	四七一	三六九	二二	二五	—	—
〃	四六〇	三六五	二二	二五	—	—
以上合計	—	—	一一一	一三〇〇	—	—
天保一四	四二八	三六五	二二	二五	—	—
〃	四三三	三七六	二二	二五	—	—
弘化二	四三八	三七二	二二	二五	—	—
〃	四五二	三七九	二二	二五	—	—
〃	四五二	三七九	二二	二五	—	—
〃	四五二	三七九	二二	二五	—	—
以上合計	—	—	一一一	一三〇〇	—	—
弘化五	四五四	三九一	二二	二五	—	—
嘉永二	四五六	三九二	二二	二五	—	—
〃	四七六	三八一	二二	二五	—	—
〃	四七三	三九三	二二	二五	—	—
〃	四六五	四〇七	二二	二五	—	—



以上合計	—	四二八八	一八	二七五三	八二	一九二二
嘉永 六	四七二	四〇一	八七三	—	一六	—
〃 七	四九六	四二五	九二一	三〇	—	—
以上合計	—	一七九四	四八	二六九一	三三	一七九四

本表に就て見るに、天保前半期には出生率三八・〇〇、死亡率四五・〇六を示し、同十四年乃至弘化四年には二五・二五對三〇・三九で、此間天保十四年を例外とするのみで、連年死亡の超過である。之は恐らく當時の凶歉飢饉の影響を受けたものであらう。<sup>(2)</sup>然るに弘化五年乃至嘉永五年には逆に二七・五二に對する一九・一二、嘉永六七年には二六・九一對一七・九四で、何れも出生超過であるが、前期に比して兩者共率が低下してゐる。

結局總人口に於ては天保二年の八二六(寛政五年には六八五)が、嘉永七年には九一一に増加した。此間判明してゐる年の總出生者數は四九〇(平均出生率三〇・八八)、總死亡數は五〇〇(平均死亡率三一・五二)で、一〇人の死亡超過であるが、入村者が出村者よりも多かつたので、總人口數は斯く増加したのである。尙本村は今福村と反對に終始男が女よりも著しく多く、寛政五年には女一〇〇に對し男一〇五、天保二年及嘉永七年には共に一一一を示してゐる。

- (1) 社會經濟史學第三卷第八號(昭和八年十二月)。
- (2) 同誌八九頁。

### 五、筑前國宗像郡池田村の例

本村は現在福岡縣宗像郡池野村に屬する大字であるが、其人口變遷に就て先年伊東尾四郎氏が「徳川時代に於ける農村人口の停頓状態」と題して紹

介された。<sup>(1)</sup>即ち之に依り吾々は延享三年から文化十五年(文政元年)に至る七十二年間の男女別人口及男女別出生數を知り得るのであるが(但し此内延享三年、寛延二年及文化七年以降は出生者數が判明せぬ)、今前記の例に倣ひ每五箇年の出生率を算出しよう。

筑前國宗像郡池田村人口及出生數、同比率

年次	人口		出生		出生率
	男	女	男	女	
延享 四	三六九	三二五	六八四	四	一〇
〃 五	三六七	三二七	六八四	五	一三
寛延 三	三七五	三二三	六九八	七	一七
〃 四	三五八	三三二	六八〇	四	一八
寶曆 二	三七〇	三三〇	七〇〇	一一	一八
以上合計	—	—	三、四四六	—	六五
寶曆 三	三七一	三三四	七〇五	六	一三
〃 四	三八〇	三三二	七〇二	一一	一六
〃 五	三八六	三三五	七一一	一五	三〇
〃 六	三九六	三三七	七三三	一〇	一一
〃 七	四〇五	三三九	七四四	一一	二二
以上合計	—	—	三、六〇五	—	一〇三
寶曆 八	三九九	三三九	七三八	五	一一
〃 九	四〇四	三三五	七三九	四	一四
〃 一〇	四〇二	三二八	七三〇	一三	一九
〃 一一	四〇〇	三三二	七三二	九	一八
〃 一二	四〇〇	三三九	七三九	八	一八
以上合計	—	—	三、六七八	—	一一〇
寶曆 一四	四〇一	三四三	七四四	九	一五
明和 二	四一九	三五七	七七六	二二	三七

三	四三二	三五二	七七四	一四	六	二〇	
四	四二一	三四六	七六七	九	九	一八	
五	四二七	三五五	七八二	七	一五	二三	
以上合計	—	—	三八四三	—	—	一一二	二九・二四
明和	四二六	三五八	七八四	九	九	一八	
六	四二四	三五四	七七八	七	三	一〇	
七	四二四	三五五	七八〇	一〇	六	一六	
八	四二四	三五五	七八〇	九	七	一六	
九	四二八	三五五	七八三	一〇	四	一四	
安永	四二〇	三五五	七七九	—	—	—	
以上合計	—	—	三八九六	—	—	—	一八・九九
安永	四三三	三四六	七七九	一四	六	二〇	
三	四三三	三四八	七八三	—	—	—	
四	四三三	三四八	七八三	—	—	—	
五	四三九	三四八	七八七	九	六	一五	
六	四三六	三四八	七八四	八	六	一四	
七	四三〇	三四九	七八九	—	—	—	
以上合計	—	—	三、八八二	—	—	—	二一・九〇
安永	四〇一	三三〇	七三一	六	五	一一	
八	四〇四	三二五	七一九	—	—	—	
九	三九六	三二二	七〇八	一四	七	一一	
一〇	三九七	三二二	七〇九	—	—	—	
天明	三九七	三二二	七〇九	—	—	—	
二	三九七	三二二	七〇九	—	—	—	
三	三九七	三二二	七〇九	—	—	—	
以上合計	—	—	三、五九一	—	—	—	二三・六七
天明	三九七	三二二	七〇九	—	—	—	
四	三九七	三二二	七〇九	—	—	—	
五	三九七	三二二	七〇九	—	—	—	
六	三九七	三二二	七〇九	—	—	—	
七	四〇八	三二七	七三五	一三	二	二五	
八	四〇五	三二二	七三七	六	一	一一	
九	四〇四	三二二	七三七	八	六	一一	
以上合計	—	—	三、六四六	—	—	—	二五・二三
寛政	四一六	三四〇	七五六	一三	一	二四	
元	四一九	三三九	七五八	—	—	—	
二	四〇九	三四三	七五二	一四	一〇	二四	
三	四〇九	三四三	七五二	—	—	—	
四	四〇一	三四三	七四四	一〇	二	二二	
五	四一四	三四三	七四七	一六	八	二四	

徳川時代の出生率及死亡率

以上合計	—	—	三、七五七	—	—	—	一〇七	二八・四八
寛政	四二〇	三五六	七五六	九	八	一七		
六	四三〇	三五〇	七八〇	一四	一五	二九		
七	四二七	三六二	七八九	八	一三	二一		
八	四二五	三五五	七八〇	九	九	一八		
九	四三二	三七〇	八〇二	一三	一五	二八		
以上合計	—	—	三、九〇七	—	—	—	一一三	二八・九二
寛政	四二七	三六八	七九五	一三	一三	二六		
一〇	四二九	三七三	八〇二	八	一三	二〇		
一二	四三七	三七三	八〇二	一四	一三	二六		
元	四三五	三九〇	八二五	九	一〇	一九		
二	四三六	三八八	八二四	一四	六	二〇		
三	—	—	四、〇五六	—	—	—	一一一	二七・三六
以上合計	—	—	四、〇五六	—	—	—	一一一	二七・三六
文化	四三一	三八六	八七	九	七	一六		
元	四二八	三九三	八二一	一〇	二	二二		
二	四二七	三九一	八一八	一〇	一〇	二二		
三	四三〇	三九三	八二二	八	六	一四		
四	四三五	三九六	八三一	一五	二	二六		
五	四三六	三八八	八三四	七	一〇	一七		
六	—	—	四、九四四	—	—	—	一一六	二三・四六
以上合計	—	—	四、九四四	—	—	—	一一六	二三・四六

本表に依ると出生率は一高一低、高率と低率が反覆して、此間に一の趨勢を示す様な特異な傾向は見られない。死亡者數、従て死亡率が不明なのは遺憾であるが、總人口數は漸増して七〇一人から八三四人となつた。然し本表には削除したが、文化七年以後漸減して文政元年には七六五人となつた點から見れば、其後出生率の低下か、或は死亡率の上向又は出村者の増加があつたと見なければならぬ。本村に於ても女が男に比して非常に少く、延享三年には女一〇〇に對して男一二〇、文化六年には一一〇、文政元年には一一一となつてゐる。出生數に於て男女略、相如くに拘はらず（男の出生總數五八六、女の出生總數五五八）、總人口數に於て常に著しく

男子超過を示してゐることは、女子の出村者が多かつたのか、或は女兒間引が行はれたのではないかと考へられる。

(1) 「社會經濟史學」第七卷、第十一號(昭和十三年二月)。

## 六、其他の若干例

以上は一藩或は一村に就て比較的長期間の出生、死亡率であるが、序乍ら極く短期の或は一年限の例を若干紹介しよう。

(イ) 元祿五年の唐津藩の例

植村平八郎氏の「唐津藩の育子政策」<sup>(1)</sup>なる論稿中に、元祿五年十月調の同藩の戸口、出生及死亡數が見ゆるが、戸數一一、三九八軒、人口五四、九九四人(男三二、七三八人、女二二、二五六人)で、出生四〇二人、死亡三六五人である。率は出生七・五四、死亡六・六四で兩者共餘りに低率である。十月調故或は滿一年間の計算ではないかも知れぬが、植村氏に依ると同藩では間引の弊習が甚しく、主に女兒を間引いたと云ふから、<sup>(2)</sup>出生率は或程度低かつたのであらう。

(ロ) 新庄藩金山の例

高橋梵仙氏の「墮胎間引の研究」(一五七頁)に、貞享二年、四年及元祿二年、三年の四箇年度の同地方人口數と出生及死亡數が掲げられてゐる。之は墮胎間引の行はれた例證として擧げられたもので、左記の如く出生率が甚だ低きこと竝に男女人口數及出生男女數に大差あることが、女兒の墮胎間引を證するのである。

年次	出生數		死亡數		千分比率	
	男	女	男	女	出生	死亡
貞享二	二、二五七	一、七五八	四、三三三	三、七〇六	二〇・七	一七・三

〃	四、二五〇	一、七七六	四、三三六	三、七〇七	二〇・八	一七・三
元祿二	二、四七六	一、八〇一	四、三三七	三、七〇六	一九・九	一七・三
〃	三、二〇四	一、七三三	四、三三六	三、七〇六	一九・九	一七・三

(ハ) 上總國武射郡富田村の例

前記二例は墮胎間引に因る低出生率の例であるが、之と反對に墮胎間引を免除した爲に出生率を著しく引上げた例として、本庄博士は上總國武射郡富田村を紹介された。<sup>(3)</sup>同村は高一三三石、元祿頃戸數一九六軒、人口一千人位だつたのが、墮胎間引の結果戸口が激減して安政二年には一一二軒、五一七人、即ち約半減した。此弊習が如何に甚しかつたかは、安政四年の出生二六人中、存命一三、死亡(産)者一三で、存命者中十名迄が長男、又死亡者中九人迄は次男以下であつたことに依て知られる。<sup>(4)</sup>然るに同村の特志家大高善兵衛が此弊風を戒諭し、又貧兒孤兒を養育するに努めた結果、安政五年以後年々出生率を増し、又乳兒の死亡率を低下した。即ち五年には出生二六人、六年二九人、萬延元年三一人となり、假に安政二年の總人口に比すると五〇以上の率となる。又死亡數は低減して夫々九人、七人、八人となつた。<sup>(5)</sup>

(ニ) 長野縣平野村の例

平野村誌上卷(一四八頁)には、舊今井村外九ヶ村(此等が合併して平野村となり、又現在の岡谷市の母胎となつた)の寛文五年から明治五年に至る人口の變遷を掲げてゐるが、其中出生及死亡數を記するのは天明五年のみである。今之に依て兩率を計算すると次の如くであつて、各村共殆ど死亡超過を示し、全體の比率は出生二一・二六、死亡二五・三三で、前年に比し實數に於て一四人を減じてゐる。

平野村出生及死亡率(天明五年)

村名	總人口	男	女	出生數	死亡數	千分率	
						出生	死亡
今井村	四八七	二五一	二三六	五	三	一〇・七	二四・六
西堀村	二七六	一四一	一四四	九	三	三・七	四・七
小梅澤新田	三三	一七	一八	一	〇	二・八	〇
若宮新田	三	一	一	〇	一	〇	三・三
東堀村	四四	二六	二〇	一	五	二・四	一・二
小井川村	八三	四三	三七	九	一	一〇・七	一・三
小口村	三三	一六	一六	三	三	九・〇	九・〇
岡谷村	五三	二九	二四	三	二	五・七	六・〇
間下村	一六	七	八	三	三	一八・八	一八・八
小尾口村	四五	二五	二〇	二	八	四・四	一七・八
合計	三、四三	一、八三	一、五八	七	七	二・〇	二・〇

(1) 「經濟史研究」第四九號(昭和八年十一月)。

(2) 同誌八〇頁。

(3)(4)(5) 「人口及人口問題」一一七頁、一五二頁。

むすび

以上僅少の事例では勿論何らの結論を得ることは出来ないが、以上の概観で假に言はれるとすれば、徳川時代に於ても案外(？)に、出生率は低くなく、やはり二〇乃至三〇臺を上下したといふ事である。然し之に對して、或は之にもまして高かつたのは死亡率である。天災飢饉の爲に死亡率が臨時的に高いのは別としても、恆常的にも高かつたことが窺ひ知られる。徳川時代の人口が停滯した理由は、恐らく此死亡率の高かつたことに依るであらう。當時の人口の停滯性は色々の見地から説明されるであらうが、社會經濟史的な立場から、假に常識的な概括的な見方を以てすれば、鎖國下の又領域に限られたる封建的生產關係、經濟關係が、既に發展性を

徳川時代の出生率及死亡率

失なひ、矛盾の極、將に崩壊に瀕して、其主要生産たる農業生産力も行きつまり、從て人口收容力も一般的に極限に達してゐたのであると説明することが可能であらう。

國勢調査間年次に於ける男女年齢

別人口の推計 (二)

館 稔  
窪 田 嘉 彰

五

前號に於ては、昭和五年及昭和一〇年兩度の國勢調査間年次に於ける男女各歳別年齢構成を補間した。本號に於ては、大正九年及大正一四年、大正一四年及昭和五年の各國勢調査間年次の人口構成を推計し、尙併せて大正九年第一回國勢調査以前大正五年に至る迄遡つて推計を試みた。かくて大正五年より昭和一五年に至るまで二十五箇年間の男女年齢各歳別人口を推計し得たこととなる。

推計方法は前號所載の方法を一貫して用ひ一應統一して比較し得ることとしておいた。ただ此の推計方法の根幹をなす生存率については、大正一五年から昭和四年に至る間は、大正一五年より昭和五年に至る事實に基いて算定されたる内閣統計局第五回生命表に、大正五年から大正一三年迄は、大正一〇年より同一四年に至る事實に據る内閣統計局第四回生命表の生存率を用ふることとした。

以上の結果を取纏めて表示すれば、以下、第二表の如くである。